

タイトル：

社会における病理医—病理診断の標準化、精度向上にむけて—

津田 均（国立がんセンター中央病院病理）、松野 吉宏（北海道大病院病理部）

内容：

病理診断は医療が行われる上で重要な役割を果たしているが、アナログ情報である形態学を基盤としているため診断スキルの習熟に時間がかかる上、病理学という未解決の領域を含む学問体系の上に成り立っているため、学問的信念などの主観的要素が入り込む余地がある。そのことから、同一検体の診断に関しても病理診断名が施設間や同一施設の病理医間で異なるという事態があり、病理診断精度向上の重要性が注目されるようになってきた。1992年から厚生労働省がん研究助成金「プロトコール研究のための病理診断の精度向上に関する研究」班研究が継続され、病理診断基準の精度が正面から研究対象として取り上げられるようになった。その後も、地域の病理医間のネットワークを活用した会合やコンサルテーションのような草の根活動とともに、テレパソロジーやバーチャルスライド等 IT 技術や、システマティックな免疫組織化学の精度評価・保障の研究・導入の試みなどが行われている。2007年から施行されたがん対策基本法では「がん医療の均てん化促進」は基本的施策の一つとされている。どこの地域、病院でもある一定以上の精度の高い病理診断が提供される、というコンセプトは魅力のあるものと思われ、実現できれば、臨床側、患者側からの病理診断への信頼は揺るぎのないものとなり、病理医に対する社会からの高い評価も定着していくと思われる。

日本病理学会の社会貢献にとって大きな課題である病理診断の標準化、精度向上を目指すいくつかの取り組みとして、今回、病理医のネットワークを利用した病理診断支援、免疫染色の精度保障システムの構築、海外の精度管理システム導入、そして国立がんセンターにおけるがん対策情報センターを中心とした活動、などについて現状、展望、問題点等を講演していただき、関連する諸学会との関わり、或いは政策として行政に反映していく仕組みづくりなどの観点からの議論を通じて今後の方向性を見出していきたい。